

本田慎一郎（著）

豚足に憑依された腕 — 高次脳機能障害の治療

宮口 英樹

（広島大学大学院，作業療法士）



ミシュランガイドでたとえるなら、躊躇なく三ツ星をつけたい。OTとして認知神経リハを用いた臨床の第一線で15年以上かかわってきた著者の魂が宿った書籍である。ロマンティック・サイエンス（記述科学）とは、「対象者のありのままの現象を考えぬき、それを捉え理解しようとする科学観（本文より）」であり、脳損傷により患者が見せる千状万態な病態を著者がどこまで考え抜けるか、ひと握りも隠すことなく臨床家に問うている。リハ科学におけるエビデンスとは何かを再考させられた内容である。

本書の印象を簡潔にいうと、見えることの不自由さである。患者しか知り得ない身体感覚、イメージ、思考の揺らぎ。たとえ、それがわからない何かであったとしても、臨床とは、そこに近づくための使命であることが本田氏から伝わってくる。見えてくるがゆえに、あるいは見えない反芻に、そのままにしておくことができない。直観という非科学的な印象をもつかもしいが、先入観を捨て、患者に共感し、自己の身体をも媒介として、患者との出会いの数だけ、人を知るという発見をするのである。

本書は15の章とそこに登場する16名の患者が掲載されている。「豚足に憑依された腕」と目を引くタイトルは、一見奇をてらったように感じるが、著者でさえ想像

できなかった患者世界がそれぞれの章のタイトルに現れている。各章は、一人ひとりの物語で構成されている。物語は、患者の紹介から経過を、具体的な患者とセラピストの会話を中核に構成することで展開する。そして、神経学的な病態解釈、仮説形成、介入、病態解釈が繰り返されながら進んでいく。なお、本書では必ずしも物語とは表現していない。しかしながら、患者と出会った時期、OTとして本田氏が出会った治療場面は、本当に物語のようだ。出会う時期が異なれば、まるで異なった治療の記録になるからだ。

本書の特徴はいくつかあるが、ハイライトは、リアルに綴られた患者と本田氏の会話であろう。片麻痺、半側空間無視、嚥下障害、失行症、慢性疼痛、失語症、失調症、整形外科的疾患、と多様に登場する。しかし、疾患と介入が直結しているわけではない。疾患による先入観から入るのではなく、なぜ、患者はそう表現するのか、しないのか、できないのかを考え抜くことから始まり、神経科学の知見に基づいて臨床推論としてひもといていくのである。

本書に登場する半側空間無視患者である。「私の左の靴が重い、重いんやわ。片方の靴だけが重いんやわ。右の靴はどうもないねん。だからいい靴を買えば軽くなると思って高い靴を買ってみたんやわ。でもまだ重いねん。なんで

やろか？（症例D）」このような妄想的思考がなぜ起こるのか。臨床家なら誰しも同様の経験をしているだろう。結果的に「問題なく、足も軽くなった（本文より）」治療効果は、どのような介入によって得られたのか、本書を読んでほしい。今日の神経心理学の礎をつくったとされる、Luriyaの記述を重視した臨床医学の世界が思い起こされる。本書を読むと、言語が治療であり、評価であり、共感だということにあらためて気づかされる。感情・情動を丁寧に扱おうとする姿勢にも共感できるだろう。

本書の介入の理論ベースとなっているのは、認知神経リハである。そのため、本書で用いられる概念は、意識経験、表象化、記述、メタファー等、少々難解だと感じるかもしれない。理解を深めるために、多くの関連図書を参照してもらいたい。

本書を脳損傷患者にかかわるすべての臨床家に推薦したい。臨床における治療介入のアイデアを目にするだけでもいい。学生には、臨床推論とは何かを知る機会になるだろう。また、研究者には患者の表現や治療介入の効果について検証するヒントが得られるだろう。本書が目の前患者にかかわる臨床家の紐帯となることを願う。

〔 A5判 594頁 5,500円＋税 〕
協同医書出版社 刊
☎ 03-3818-2361